

愛餐について Agape Feast

小泉友美 KOIZUMI T



目次

愛餐について Agape Feast 食べる事とアガペー分裂を防ぎ 1 つとなる為に新 約聖書より	1
--	---

愛餐について Agape Feast 食べる事とアガペー分裂を防ぎ 1 つとなる為に新約聖書より

愛餐について Agape Feast 食べる事とアガペー 分裂を防ぎ 1 つとなる為に新約聖書より

キリスト教スピリチュアリティにおいて、アガペー (神愛) という言葉は、神様の無条件な愛という意味です。

キリストの身体であるパンと、キリストの血ワインを共に食べ、飲む行為によって、ばらばらになった人々が 1 つとなる愛の神秘の円いについてまとめてみました。

新約聖書において、食事をする行為は大切で、頻繁に出て来ます。一人で食事をする (孤食) 章は無く、キリストは自分の弟子達や大勢の群衆と食卓を共にしたといます。

イエスは五千人の群衆に、五つのパンと二匹の魚から奇跡により、十分なパンを分けさせて、全員食べる事が出来、満腹したといます。(マタイの福音書 14 章 16 節から 21 節)

また 3 日間食べる物が無く、疲れきった弟子達に、残りの七つのパンと小さな魚から奇跡により、十分な食べ物を分かち合いました。(マルコの福音書 8 章 1 節から 10 節)

イエス・キリストが招かれたガリラヤのカナの婚礼において、キリストは、6 つの水瓶に溢れた水をワインと変えて、婚礼の為に良いワインを振る舞いました。(ヨハネの福音書 2 章 2 節から 11 節)

また、キリスト自身が自分の命をパンとワインとみなして、弟子達に与える為に、十字架にかけられる前日、最後の晩餐を催しました。(ルカの福音書 22 章 17 節から 20 節)

この主の晩餐は、過越祭の食事を象徴しています。(エジプトの奴隷状態から解放された事、神との契約関係に入った事を祝う毎年の行事)

パンとワインは、イエスの体と血に為るのでは無く、イエスの命そのものを表し、弟子達に委ねられました。そして、一生かけて忘れる事の無い様に、イエス・キリストと共に食事をした事の記念の象徴となったのでした。ミサを行う度、祭司と信者はキリストの生と死、そして復活を思い出します。

アガペー (神愛) という言葉は、神の無条件な愛という意味であり、キリストは自ずの命を使徒達を愛する事で与えながら、アガペーの内に 1 つに結合しました。

このキリストと使徒達の食卓を共にするアガペーは、エウカリスティア聖体祭儀と称されて、キリストの身体であるパンとキリストの血であるワインを共に食べ、飲む人々は、

キリストの1つの体の内に摂取されて、神に一致するという、神秘的な円いの秘跡となります。

唯一のエウカリスティアに与って、我が主イエズス・キリストの肉は唯一、私達を一致させる御血の杯は唯一つ、教会は一つとなります。

このエウカリスティアは、キリスト教信徒共同体の愛の実践による典礼 liturgia として、一つの共同体に対して個人の果たす奉仕をキリスト教の祭儀に適用したものです。

この神の愛の秩序ある調和は、教会の中の分裂を、キリストの体の中に1つとする事です。

1人1人の異なりが、そのままの個性を持って、1つの信仰に調和されます。

この円いのエウカリスティアは、分裂を防いで1つとする無償の愛としての、神愛の実践です。

神道においても、神と人が一体となる事が、神人共食として表現されています。

祭の特徴は、神様にお米を始め、お酒、海魚、川魚、野鳥、水鳥、海菜、野菜、果物、お菓子、お塩、お水というお供えとして、そのお下がりをお祭りに参列した人達でいただきます。食べ物を通して、神と集まる人々が一つとなる事です。

三重県の伊勢神宮・外宮では、現在においても、毎朝夕、オオミケ祭という儀式が行なわれています。

第二十一代の雄略天皇の夢告において、伊勢神宮内宮に祀られているアマテラス大神が一人で食事を十分に取り取る事が出来ないため、穀物と食事の女神トヨウケの神を外宮にお祀りした事に由来しています。このオオミケ祭は、神宮のみで行なわれて、外部の人々には公開は禁止されています。この伊勢神宮のオオミケ祭は、祭に参列した全員で分かち合うものではなく、神官と神との密接な神人共食です。神道の古事記内には穀物起源神話があり、スサノオの神にご馳走をふるまった食物の女神オオゲツヒメは、女神の身体より鼻、口、尻から様々な食物を取り出して料理をしましたが、自分の命が犠牲となった事は、キリストが自ずの身体を象徴的にパンとワインとして、使徒達と分かち合った事に通じる様な気がします。食事には、命を犠牲となった動物、植物達と、その命を戴くという事で、生と死の倫理が色濃いものです。

初期キリスト教会の時代において、このアガペー（神愛）は、アガペーの食事として、兄弟愛のお互いの絆で強め、信者達と交わる事として紹介されました。

一世紀末から二世紀初頭、シリアにおいて著作された、著作者不明の、十二使徒の教訓（ディダケー）において、エウカリスティアは聖餐として、キリストの名において、洗礼を受けた者以外、集まって、食べたり飲んだりしてはいけないといひます。使徒達は、撒き散らされたパンが集められて一つとなる様に、地の果てからキリスト教会の元で一つになる事です。

紀元2世紀のキリスト教神学者、ユスティノス（100年?-165年）はパレスチナで生まれて、エフェソスでキリスト教に改宗しました。ユスティノスのエウカリスティアは、感謝であり、キリストの愛の記憶式であって、太陽の日と呼ぶ曜日には、町ごと村ごとの

住民すべてが一つの所に集って、一同起立して祈りを捧げます。そしてこの祈りがすむと、パンとワイン、水が運ばれて、お互いに力の限り感謝をします。

愛餐 Agape Feast は、私達のばらばらな生き方を、罪人も善き人々も、一つの形を持った神(キリスト)の愛へと結びつけて、合一の内に平和の恵みが与えられます。

このお互いに共有する愛餐において、神の愛によって動かされて、神の愛の寛大な贈り物を得られます。

終わりに

神は天と地、光、風、水、種を持つ草、種を持つ実でこの果樹園を栄えさせる。タブアハの黄金色タルト、オレンジ、檸檬、杏、花梨の冷たき飲み物、命の木の実、この楕円形の祝福の実、褐色の実タムル、すもも、蜂蜜の滴る天使のパン、青緑色オリーブオイルに、香り高い樹脂を持って、真っ白で、円い焼き菓子、パン生地に干しいちじくを細く混ぜ合わせた、三角形の焼き菓子、油で炒めたマリアのアザミ、ゼニアオイのハーブ・ティー、酢っぱく苦味のある種無しの餅、ベルモットの乳香、一人で食べるには、多過ぎて、あまりにもせっかちに食べてしまうので、気がつく私の独りの席が2つ、3つと分かち合ってゆき、皆で共に、食事をする事の恩恵と感謝。

この地上の糧の宴において、生きる事、赦す事を教わる。一諸に食事を取る事は、恩恵です。

キリストの言葉を思い出します。

" 食べなさい。そして、この杯を飲みなさい。 "

2026年4月9日 フランス・アンジェ Angers 平和 祈

愛餐について Agape Feast 食べる事とアガペー

著 者 小泉友美 Koizumi Tomomi

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
